erudio 7

国立大学法人 岩手大学 大学教育総合センター通信 2007.11

Iwate University : University Education Center

Contents

センター長より……2
新スタッフ・兼務教員紹介……3
ESD国際シンポジウム……7
入試部門……8
全学共通教育企画・実施部門……10
教育評価・改善部門……12
専門教育関係連絡調整部門……14
学生生活支援部門……15
就職支援部門……16
新規開講授業紹介……17
現代GP……18
（各学部の特性を生かした全学的知的財産教育）
現代GP……19
（「学びの銀河」プロジェクト）
アイアシスタント……20
全学共通教育の理念と教育目標……21
委員会及部門会議名簿……22

センター長より

玉（たま） 真之介（しんのすけ）
大学教育総合センター長

■新共通教育のスタート

世の中で、教育改革ほど難しいものはないかもしれません。その教育改革が大学に求められています。岩手大学は、法人化を受けとめて「教育重視」を打ち出し、大学教育センターが中心となって教育改革を開始しました。全学共通教育改革案は、平成18年度実施を1年遅らせ、運営委員会における3年間12回の審議の上に合意に達しました。

その改革案が4月からスタートとなりました。入学前教育、アイアシスタント稼働、英語のプレースメントテスト、外国語のインテンシブ方式導入、基礎ゼミナールの開講、高年次課題科目の開講、学習支援講座など、新しい取り組みが大きな支障なくスムーズに開始できたことは、責任者として何より喜ばしいことでした。

全教員が所属する分科会の活動、ESD「学びの銀河」という「目的の共有」は、まだ始まったばかりですが、今後の共通教育の充実においては芯となるものであり、徐々にその真価が発揮されてくるものと期待しています。

■「旗印」の明確化と「目的の共有」

教育改革に取り組んでいるのは、本学だけではありません。全国の大学が取り組んでいますが、いずれも苦労しています。最大の理由は、各学部がバラバラで全学的取り組みにならないということです。この結果として、共通教育が各地で壊れていっています。専門教育に対して、共通教育を再構築しようというモチベーションが低いことは全国共通といっても過言ではありません。

この現状の打開には、学部という砦を出て全学へ結集するための「旗印」が必要であり、「目的の共有」が必要だと思います。本学の場合には、ESD「学びの銀河」が旗印であり、持続可能な社会を作るために知識を行動に移せる「21世紀型市民」を育成するということが「目的の共有」です。

専門家である前に一市民として行動できる人材の育成を、岩手大学の教職員が力を合わせて取り組んでいく必要があります。

■1つのモデルとしてのフィンランド

いま、教育改革をめぐっては、フィンランドに注目が集まっています。安倍内閣が目指した市場原理の方向とは逆の「平等な教育」を徹底的に重視したフィンランドが、OECDの学力試験（PISA）においてトップとなったのです。この試験は、単なる知識を問うものではなく、読解力、科学リテラシー、そして問題解決能力を問うものです。しかも、すばらしいところは、受験者の学力格差が最も小さかったことです（NHK未来への提言「学力世界一」がもたらすもの）。

いま日本の多くの教育関係者がフィンランドへ雪崩を打って視察に向かっています。図書も多数出版されています。しかし、そうした中で紹介されていない事実は、フィンランドが国を挙げて国連「ESDの10年」に取り組んでいると言うことです。フィンランド大使館勤務のヘイッキ・マキパーさんの著書『平等社会フィンランドが育む未来型学力』（明石書店、2007）は第1章「責任感ある市民を育てる」で、若い頃から社会的責任を教える「持続可能な開発のための教育」に国を挙げて取り組んでいることが強調されています。

大学教育におけるESDについても、教育省からレポートが発行されています（2007.6）。本学のみならず岩手県全体で、フィンランドを参考に教員養成や小中高の教育にESDを織り込んでいく取り組みを岩手大学から提起していく必要があると考えています。

この考えに立って、来年7月のG8サミットに合わせて県内すべての幼稚園長、小学校長、中学校長、高校長、大学学長に呼びかけて、岩手県幼小中高大ESDサミット（仮称）を開催する計画です。

新スタッフ・兼務教員紹介

古川（ふるかわ）　務（つとむ）

【入試部門】
准教授 人文社会科学部専任担当

近年とみに受験生の志願状況が気にかかるようになってきました。志願者の確保は、大学全体の重要課題だと思います。受験生人口の減少から、入学者の選抜方法も多様化する方向に向かっているように思えます。人文社会科学部でも、本年度からAO（アドミッション・オフィス）入試を始めました。入試がますます複雑化していく中で、あまり入試に詳しくないわたくしとしては、その能力に限界はありますが、なんとか与えられた職務をこなしてまいりたいと思います。

黒田（くろだ）　榮喜（えいき）

【全学共通教育企画・実施部門】
教授 農学部専任担当

今年4月から農学部教務委員となり、全学共通教育企画・実施部門の兼務教員として働くことになりました。今年度から全学共通教育の実施体制が大きく変わり、新体制へスムーズに移行することが求められています。また、岩手大学の限られた人的資源でより充実した教養教育を提供することを目指して行われた今回の大幅なカリキュラムの改正が、着実に成果を上げることが期待されています。そのためには、共通教育システムの不断の点検と改善が不可欠と思われます。微力ながら、兼務教員として全学共通教育の改善・充実に貢献できればと考えています。

小笠原（おがさわら）　義文（よしふみ）

【全学共通教育企画・実施部門】
教授 教育学部専任担当

「人間の健全なる精神は健全なる身体に宿る」ということばがあるとおり、大学生活環境下でも、学生同士の交流は勿論のこと、教員との語らいや事務員への対応そして諸行事に積極的に参加し順応できる、健全な精神を維持できるよう願っています。

健康的な学生生活を送るための知識を理解し、行動できる身体活動の必要性を自覚して欲しいため、今年度は入学間もない前期授業開始から二週間にわたり、保健管理センター立身先生はじめ分科会教員による講義を実施しました。

これまでの「健康・スポーツ」科目は、学生アンケート評価では悪くないようですが、スポーツの実践を通して、健康と体力の増進を図っていくことができるように鋭意努力したいと思います。

恒川（つねかわ）　佳隆（よしたか）

【全学共通教育企画・実施部門】
教授 工学部専任担当

「科学技術」分科会は、科学技術と人間社会の関わりをテーマに、現代社会の繁栄を担う様々な科学技術開発の歴史と現況そして未来を、社会や経済との関連も含めて理解し、幅広い教養とものの見方・考え方を習得することを目指しています。現在は「科学と技術の歴史」を開講していますが、20年度には新たな科目を開講する予定です。その中では、研究の第一線で活躍している先生方に最先端の科学技術を紹介して頂くばかりでなく、その技術が今後の暮らしの中にどう関わってくるのか学生諸君と共に考えながら、幅広い教養が身に付けられる講義にしていきたいと考えています。分科会メンバーの先生方には、ご協力をお願い致します。

新スタッフ・兼務教員紹介

鈴木（すずき）　正幸（まさゆき）

【教育評価・改善部門】
准教授 工学部専任担当

前任の李先生の転出に伴う交代で10月に就任しました。まだ、一度の会議にも出席しておらず、抱負を語れませんので、自己紹介をします。

教育は、僕には大きすぎてとらえどころがありませんが、講義には大いに関心があり、よい講義をすることをいつも心がけています。僕は教員であるとともに、プログラマです。最近は、コンピュータとネットワークの最も正しい使い方は、「人と人との共同作業を支援すること」であるとの思いを強くしています。講義は、教師と学生、学生と学生の共同作業でありたいとの思いから、講義や演習の過程を、WikiというWeb上の共同作業ツールで作成しています。講義を支援するプログラムを作ることが、最近の夢です。

僕にとってもう一つの大切な教育活動は、研究室ゼミです。週に六回のゼミを行い、ゼミ内容や議論や作成物を Wiki に記録しています。講義やゼミをWebに置き、自分を含めて傍観できるようにすることは、よくしたり評価するための、いい方法だと思っています。しかし、教育の観点から研究室活動をどう評価すべきか、僕は全くわかっていない状態です。

自分のやり方を見直し、疑問を解消するいい機会に恵まれたと思っています。よろしくお願いします。

立石（たていし）　貴浩（たかひろ）

【教育評価・改善部門】
准教授 農学部専任担当

センター東側に「持続可能な未来のために学ぶ」と書かれた看板があります。学生達はこの文章の意味を理解できているでしょうか。ヒトの人口が増加し続けている現状を、個体群生態学的視点で俯瞰すると、収容力（この場合食物量）を越え、将来個体数の急激な減少が起きることは明白です。つまり、ヒトの未来は「持続可能」ではなく「崩壊」であるということ。むしろ、未来の崩壊を避けるために今学ぶ必要があるように思われます。

話は変わって、ある雑誌の記事に、ナイロビのスラム街に住む死に瀕している親との問答が掲載されていました。「一番欲しいものは教育だ。」死に直面し明日の食にも欠く状況の中で、食料ではなく、子供への教育の機会を求めて、教育に子供の将来を託しているのです。衣食住に足り教育の機会にも恵まれた学生達に、未来の破綻を避けるためにも意味不明の文章の奥にある学びの本質を考えて欲しいものです。

押切（おしきり）　源一（げんいち）

【専門教育関係連絡調整部門】
教授 教育学部専任担当

「大学教育総合センター」の活動も、基礎ゼミの導入、Webシラバスの入力等、単に「共通教育」以外にも一般教員にいろいろと関係することが最近、とみに増えてきました。更に、今年度に入って「理系基礎教育」の見直しが重要な論点になっています。学生の未履修科目や基礎学力の低下（?）に対応する必要があることや、教員の授業負担に関する非常にデリケートな部分にタッチせざるを得ないことなど、数年間かけてきちんと議論を積み重ねないとうまくいきそうにない問題ですが、一方で早急な対応を求められているという問題でもあります。今年度限りの委員ですので、上記の問題に対して慎重な議論を重ねる方向で、センターの活動に少しでも協力できたらと思っています。

新スタッフ・兼務教員紹介

川本（かわもと）　榮三郎（えいざぶろう）

【学生生活支援部門】
教授 人文社会科学部専任担当

『親身になって教育する』

小学、中学、高校生の時と違って、大学生になると、親はあまり大学に注文や文句を言って来なくなる。たぶん親のほうは子供が大学生として自己の責任で行動していると信頼しているからであろう。もちろん大学のほうも学生の生活や学習について、手取り足取り親身になって教育指導しているからである。例えば、私が教えている中国語の学習でも、予習復習の仕方はもちろんのこと、中国人の気持ちになって覚えるように、つまり中国語の勉強の仕方まで教えているのである。ここまでしないと、学生はただ教科書の通り日本語に置き換えて覚えるだけであり、中国語が中国人の文化であり、中国人のものの考え方や見方、感じ方を表しているとまで考えが及ばないからである。さて、学生たちは二ヶ月近い長い夏休みを我が身と我が人生を見つめ直す機会にしているであろうか。

伊藤（いとう）　歩（あゆみ）

【学生生活支援部門】
准教授 工学部専任担当

今年度から兼務教員となり、レッツびぎんプロジェクトの審査や駐輪の指導、学生議会との懇談会などを通じて、全学の学生と交流する機会が増えました。本学の学生達が一定のモラルとルールの下で有意義な学生生活を送ることができるようにサポートしていきたいと考えております。

竹原（たけはら）　明秀（あきひで）

【就職支援部門】
教授 人文社会科学部専任担当

大学の全入時代を迎え、世間ではどこの大学に入学したのかを問うよりも、卒業してどこの会社に就職したのかに関心が移行していくと考えられます。たとえ就職率が100%であっても、その次の問題として就職先の企業名が話題になります。しかし、そのような議論をする前に就職を含めた進路を決めることができず、何事にも関心のない学生がいまだにたくさんいます。

全国の大学・短大の数は1200校以上もありますが、それ以上に就職先は無限にあります。学生たちは助けもなく、途方もない数の中から納得のいく就職先をはたして探すことができるのでしょうか。そのためにも学生たちの就職を主体とした進路に関して、微弱ながら協力できればと思っています。

就職はまさしく学生生活の締めくくりで、納得できる結果が得られることを願っています。

塚本（つかもと）　知玄（ちげん）

【学生生活支援部門】
准教授 農学部専任担当

学生生活支援部門の一員として活動しております。最近は学生達の価値観が多様化したと聞いておりましたので、多種多様な要求にどう対応したらいいのか悩むことが多いかも知れないと、初めは不安を感じていました。また、できるだけ多くの学生が満足してくれる岩手大学にするよう、微力でしかありませんが、やれる範囲でできる限り頑張ろうと考えていました。しかしながら、部門の一員としてリーダー格の学生達に接してみると、彼ら／彼女らの多くは自分勝手ではなく、周囲を見て自分の為すべきことを適切に判断できる力を既に備えていることが分かりました。その時、私が頑張るのは、岩手大学をどうするかではなく、学生達が自分自身で伸びていくのをどう助けるのかなんだと気付きました。学生達がより良い岩手大学を築いてくれるように私も頑張ります。

新スタッフ・兼務教員紹介

松井　照雄（まつい　てるお）

学務部長

本年4月、弘前大学から転任してきました。平成9年度から3年間入試課におりましたので、8年ぶりの岩手大学です。厳しいながら、しかし温もりのある恵まれた自然とそこに暮らす健やかな人々、岩手大学が掲げる「岩手の“大地”と“人”と共に」は私の大好きな言葉です。

大学教育総合センター内にある学務部は学生の皆さんと日常一番接する事務部門で、入口（入試）から出口（卒業・修了）まで、学習活動・学生生活全般にわたっての支援組織です。平成16年の国立大学法人化以降、各国立大学は大学のあらゆる活動に対し経営努力を求められ、社会から厳しい事業評価を受けるシステムになっています。この評価の第1に上げられるのが、学生は何を学びどのような能力を身に付けてきたのかという、大学教育の内容・質についての問いです。幸いにして本学の卒業生に対する企業等からの評価は悪いものではありません。ただ、地域性からくるものなのか責任感・ねばり強さなどが評価される反面、リーダーシップやコミュニケーション能力の向上が求められています。大学の教育方針、教育内容、キャンパスの雰囲気、そして卒業生のカラーなど様々な特徴を社会が評価することによって、今日の岩手大学としてのブランドイメージが創り上げられています。これまでの蓄積に、さらに学生の皆さんが今後の岩手大学のブランド力を高めていただくことを期待しています。我々事務スタッフも最善の支援を惜しみません。

末筆に、本学が目指す教育の定礎とも言うべき「持続可能な社会のための教養教育の再構築」と深く共通する考えでもあるかと思いますので、次のことばを書かせていただきます。

『インドは貧しいが、日本の貧しさの方がひどい。それは物質的な貧しさより、無関心で思いやりがないといった心の貧しさだ。（マザー・テレサの言葉）』

白崎　隆典（しらさき　たかのり）

【学生生活支援部門】
学生支援課長

学生生活支援部門は、課外活動、入学料及び授業料免除、奨学金、学生寮、福利厚生施設の運営、体育施設の管理運営及び学生の表彰等と幅広く所掌しており、入学してから卒業するまでほとんど全ての学生と係わっています。

今年度の主な課題としましては、上田地区学生寮の大型改修に向けた寮生との具体的意見交換を行い、意見の合意を得たいと思っております。

また、「学生生活の手引き」の見直し及び老朽化が進む課外活動施設を一つでも多く改修して、良い環境を提供したいと思います。

全ては、多感な時期を大学で過ごす学生のために、さらに、岩手大学出身を今以上に自負できるように支援したいと思います。

加藤　博（かとう　ひろし）

【入試部門】　入試課長

入試課は、入学者選抜の実施運営を行うとともに志願者を増やすための広報活動も行っています。

多様化、複雑化する入試業務を誤りなく実施するために、各学部や他の部門と連携・協力してやって行きたいと思いますが、何分私自身が大学の入試業務に関わる仕事は初めてですので、色々気が利かない点があるかと思います。

皆様方のお力を借りながら、入試の視点から魅力ある岩手大学作りに関わっていきたいと思います。

ESD国際シンポジウム

大学教育総合センター長　玉　真之介

■アジアにおける大学間連携

ESD「学びの銀河」プロジェクトの一環として、8月30日～9月1日の3日間、「持続可能な未来のための教育－アジアにおける大学の役割と連携－」と題して国際シンポジウムを開催しました。韓国からは延世大学、中国からは北京大学、精華大学、寧波大学、カンボジアからはカンボジア工学院、タイからはサイアム大学から代表を招待しました。

このシンポジウムの1つのねらいは、アジアの大学におけるESDのネットワークを作ることです。北アメリカやヨーロッパには、ESDの大学間ネットワークがすでにあります。それらは、1992年のリオ地球サミットが契機です。アジアは、10年遅れましたが、2005年からの国連ESDの10年を契機に連携が生まれればすばらしいと思います。

■環境問題と経済・地域格差

8月31日の2つのセッションでは、「環境教育からESDへ」と題して、国の政策や大学教育について、論じました。中国の精華大学では、学生たちが環境ボランティアに参加したり、キャンパス緑化に取り組んだりと、日本の大学と同じように環境問題に取り組んでいる現状が報告されました。

タイからは、サフィシェンシー・エコノミー（足るを知る経済）という国民的運動が紹介されました。いま、グローバリゼーションの下でアジアが共通に環境問題の悪化と経済・地域格差の拡大という問題に直面していることが明らかとなり、それらを一体的に取り組むESDの意義が確認されました。

■アジア的価値の再評価

9月1日のシンポジウムで議論となったのは、アジア的な価値の再評価についてです。アジアにおける大学が、これまでのようにアメリカやヨーロッパの大学に対して下位の関係にとどまるのではなく、自律した地位を確立していくためには、アジア・ナレッジ・システムが必要であるというサイアム大学ポンチャイ学長の講演を受けて、県立大学の谷口学長や本学の平山学長は共に、持続可能な社会を築いていく上では、アジア的価値観を再評価する必要があるという提起を行いました。

これに対し、むしろ地球規模の哲学が環境保全に必要とする意見と議論となりましたが、そうした議論を続けることでアジアの自己認識が進むことでは意見が一致しました。

■県内へのESDの普及

今回のシンポのもう1つの目的は、岩手県内にESDという言葉を広めることでした。岩手日報の論説での紹介や県知事からのあいさつ、校長会への説明なども行いました。その結果、少しですがESDという言葉が県内に知られるようになりました。宮沢賢治を生んだ岩手県をESDのメッカとして世界に発信し、世界のESDと結びついていく。この機会を逃さないで、来年には岩手県幼小中高大ESDサミット（仮称）をG8サミットと同時期に開催します。

入試部門

入試部門　永野　拓矢

■はじめに

大学教育総合センター入試部門も2年目を迎え、昨年の経験と反省を活かしいよいよ具体的な戦略を「実行する」年となりました。従来行われてきた企画を大きく見直す、あるいは全く意識すらしなかった企画を立ち上げて実施するなど、“新生入試部門”に相応しい年となりました。新規の取組として5点報告します。

■岩手大学単独説明会の実施

昨年までは新聞社主催の合同説明会に参加していましたが、志願者のアンケート結果や実際に対応した各学部教員から「受験生と接する貴重な機会にも拘わらず、実際の出願に結びついていない（参加者が本学受験レベルとは違う層、の意）」等の意見が続出し、「たとえ人数が減っても本学を上位志望している受験生により詳しく説明する場を設けたい」ということで本学単独の説明会に変更しました。単独開催ということに加え、経費を抑えるために会場の手配や告知は全て自前（入試課職員、入試部門専任教員）で行いました。実施時期は昨年の新聞社主催の日程にあわせ5月12日（土）に盛岡でスタート、500名近い入場がありました（入場者数に全く予測がつかなかったため、150名定員の会場を借りたのですが、開始時から300名近くが集まり大いに慌てました）。その後もほぼ毎週土曜日に開催し、最終は6月30日の仙台と2ヶ月におよぶ長期の説明会となりました。

参加者は6会場（盛岡、北上、釜石、青森、八戸、仙台）と昨年実施の半減ながら1,000名を超え昨年以上の盛況となりました。それでも今年は会場借用の都合で高校の行事とバッティングしたこともあり（高校総体や、定期考査など）「生徒を是非参加させたいが都合があわない」との指摘が多数寄せられたこともあり、来年は高校生が比較的参加しやすい6月中旬からの4週間程度で一挙に開催することを計画しています。

■ショー札幌

東北6会場の単独説明会が本学初の企画であるとすれば7月21日（土）に開催されたこの「岩手大学・岩手県立大学ショーIN札幌」も開学以来!の催行だったのではないでしょうか。本学が来年度入試から札幌に試験会場を開設する告知手段が大々的なイベントに大きく変わりました。岩手からは本学のほかに岩手県立大学、さらに岩手県も協力し、県商工労働観光部が「わんこそば大会」を企画、大学説明会が一大イベントとなりました。ただし、このままでは“岩手のローカル企画”に過ぎないためYASU氏と田村美香さん（ともに地元・北海道の人気ラジオパーソナリティ）を総合司会に抜擢し、さらにHBC北海道放送も企画に加わって電波でもこの企画をCMで流しました。当日は学校補習や学校祭、さらに他の進学説明会などの企画が重なったこともあって、受験生の数は少なかったのですが、夕方のニュースではHBCはもとよりNHKでも取り扱われました（北海道と岩手県内）。そのお陰もあってその後訪問した道内高校の先生にも意外なほど浸透しており、イベントの実施に対する認知度の高さを見れば、本学の目的（PR）は十分達成できた感触を得ました。

■がんちゃんダイアリー

大学説明会や8月のオープンキャンパス時に配布したのが岩手大学づくしの情報手帳である「がんちゃんダイアリー」です。スケジュールには本学の学年暦（例、入学式や履修申告締切日など）のほかに受験日の掲載、さらに大学の取り組み紹介欄から楽しいコラム（「岩大生の評判」「岩大名物焼きカレー」「東京行き教採バス発車!」など）など岩手大学に関する様々な情報を満載した手帳を作成しました。反応は上々で、ある県内の進学校からは「来年の3年生全員に是非配布したい」との“ご注文”もいただきました。製作コストも大変安価で、今後も継続していきたい成功企画となりました。

■AO入試

上記2点の企画とは根本的に異なりますが、当入試部門も加わって玉センター長をAG長（アドミッショングループ長）に、以下「兼務・専任教員、学務部長、入試課職員」を組織化して本学初のAO入試（アドミッションオフィス入試）を実施しました。昨年度各学部で盛んな議論が繰り返されましたが本年度は人文社会科学部で実施することになり、募集人員9名に対し、志願者71名と7.9倍の高倍率となりました。

AO入試生は学力を課さないものの様々な「実績」を持ち合わせています。わずかな定員ですが、活気ある学生が学内でどのように活躍していくのか楽しみです。

■高校訪問

昨年220校におよぶ高校訪問を行いましたが、今年も既に150校以上訪問しています（9月末現在）。他地区の多くの高校でも本学に対するイメージは良好で「（説明を聞いて）岩手大学に進学させたくなった」等の感想をいただくとこちらも嬉しくなります（半分はお世辞でしょうが）。各学部の評価が一番ですが、それに追随するのが学内の施設。大学の雰囲気やクラブの活躍ぶり、さらには「寮費が安いのも魅力!」と岩手大学の様々な角度から評価を受けることも印象的でした。教職員の皆様も高校などPR訪問される際には何かひとつでも「岩手大の○○は自慢です!」と披露出来る話題を持参しましょう。

■おまけ

手前味噌になりますが、「何故（永野は）それだけ岩手大学を巧みに（!）アピールできるのか?」と問われることがあります。大変恐縮ですが、やはり元来営業マンでしたので「自社（=岩大）製品（=ここでは学部や施設全般）をいかにして相手に購買意欲（=出願）を駆り立たせるか」を意識しています。そのためには盛岡の魅力や大学の立地条件、さらに気候など直接大学に関係のない事項まで調べます。そして学部の紹介だけではなく就職状況やその学生へのフォローなど（就職支援のプロセス）、日頃の教職員の皆様とのさりげない会話からかなりのヒントをいただきながらその先々で修正して（北海道や茨城では話の切り口を変えながら、等）「出しゃばらない程度に（これは重要!）」PRを続けています。

もちろん万事がうまくいくわけがありません。北東北以外では「岩手大学」の知名度は極端に低下します。「周辺に同じ学部があるのにわざわざ岩手まで行く理由がない」など言い放たれることは常時（苦笑）で「プライド」は打ち砕かれることは多いです。が、それでも「次回訪問の際、違う先生ならもっと印象は良いはず」など、メモを残して翌年の訪問に託します。

最後に授業を持たないため日頃学生との交流は少ないのですが個人的にも6,000名超の岩大生は皆大好きです。まじめで礼儀正しく、心から応援したくなります。一般に指摘を受ける「岩大生にやや足りないもの・・・元気さと積極性」が事実であればAO入試でそれを補う人材が入学してくれそうなのでかなり解消できると期待しています（周囲への波及効果は大きい）。よき伝統はしっかり残しつつ「全国区」に通じる大学に発展することを入口（入試・広報）でしっかり確立していくことを目指します。

全学共通教育企画・実施部門

全学共通教育企画・実施部門　山崎　憲治

■基礎ゼミナール

2007年度から全学部で転換教育として始まった基礎ゼミナールは、学習目標をおおむね達成できたと判断される。高等教育全体がユニバーサル段階に至り、転換教育の実施意義はますます重要なものになっている。大学教育を受け入れる素地を作り直すことが求められているし、さらには市民生活をする上での基本までもが、学習課題になっている。

2007年6月、基礎ゼミナール受講者へのアンケートを実施したが（回答数は人社53名、教育44名、工学63名、農学75名の計235名である）、その集計結果の一部を報告したい。それぞれの基礎ゼミナールでの学習の特色を示してもらった。56.6%の学生が少人数教育を挙げている。大学に入って少人数教育を期待しつつも、共通教育の中ではなかなか実現できなかった。高校時代、教師からの一方通行の授業に“慣れている”学生にとって「発表の方法を学ぶ」ことは新鮮であるに違いない。44.3%の学生がこれを特色に挙げている。専門の学習イメージあるいは大学での学習イメージを捕まえることができたことを特色に挙げている学生は、それぞれ29.8%、28.7%にのぼる。転換教育として課せられた課題へのアプローチが実現していることを直接示している。数は必ずしも多くはないが、「図書館に行くことが多くなった」ことを特色にあげている者が11.1%にのぼることや、「学習意欲が高まった」ことをあげるものも7.2%あることは、この科目が有す積極的意義を明らかにしている。

受講生にこの科目の評価を選択してもらった。提示した項目は、①大学生になったという実感が持てた、②他の受講している科目の興味と関心を広げた、③多くのことを学べた、④興味がもてない、⑤他の授業と変わらず、⑥負担が重い、⑦成果があがったとは言えない、⑧拘束時間が長い。始めの3項目を選択した学生は、基礎ゼミナールを転換教育として評価している。その員数は179名、回答者の76.1%を占めている。少人数のゼミで、初めての経験や、ゼミ形式で多様な学習内容を学べたことで、高校までの教育を超える学習を目指す意欲をもったと解釈できる評価をしている。基礎ゼミナールが、他の科目へ与える影響も少ない。他の科目の興味と関心を広げる契機になっていると答える学生も1/4を超えている。しかし、興味がもてない、成果があったとは言えない等のマイナス評価も23名9.8%の学生が回答している。負担が重い、あるいは拘束時間が長いという回答は、じっくりと調べる必要を求めたというプラスの評価とも解釈できる。④以下の回答では学部間のばらつきも大きく、基礎ゼミナールの学習目的と照らして、今後の課題も示されている。

■理系基礎支援講座

2006年11月から開始した理系基礎支援講座は、本年度も継続して展開されている。本年度は専門基礎を担当する教員が物理・化学・数学・生物の教科ごとに、学生の学力と教授法の意見交流を行い、支援講座を側面から支援する体制が整いつつある。5月から始めた物理・化学・数学の支援講座に延べで146名の参加者をみている。単位の出ない支援講座にこの人数の学生が自主的に参加している点に、学力不足という課題が深刻であることの共通理解と、学生が有す学習意欲への積極的評価を求めたい。07年後期も支援講座は継続する予定である。

全学共通教育企画・実施部門

全学共通教育企画・実施部門長　岡田　仁

■高大連携科目

高校生の受講者数が期待ほど伸びていないのが気になります。大学進学者の増加に伴い高大連携の必要性はますます高まっていますので、大学側としても、もう一工夫したいと考えています。

表1:平成19年度前期開講科目と受講者数

授業科目名	担当教員	人数
欧米の歴史と文化	佐藤　芳彦	4
岩手大学ミュージアム学	岡田　幸助　ほか	0
地域と生活	高橋　宏一	0
知的財産入門	松岡　勝実	3
自然と数理	川田　浩一	0
欧米の文学	山本　昭彦	0
日本の歴史と文化	樋口　知志	3
自然と法則	河田　裕樹	2
合計		12

■分科会FD活動の実施

岩手大学の教員は全学共通教育のいずれかの分科会に所属することになりましたので、今年度から分科会単位でもFD活動を開始しました。他大学が主催するFD研修会に参加するなど、これまでにない視点を取り入れながら関連分野の教育の向上に努めています。

■北東北3大学単位互換による集中講義の実施

北東北国立3大学がそれぞれ特色ある科目を提供し合って教養教育の充実を図ろうとするプロジェクトはすっかり軌道に乗りました。表のように受講者数一つとっても本学にとって大変重要な役割を果たしています。

なお、本学からは,秋田大学に「ジェンダーの歴史と文化」(海妻径子)、「現代政治を見る眼」(丸山仁)、弘前大学に「言葉の世界」(小島聡子)、「自然のしくみ」(花見仁史)を提供しています。関係の先生方、大変ありがとうございました。

表2:平成19年度北東北3大学集中講義開講科目と履修者数

授業科目名／期間	担当教員	履修人数
障害と共生IA　―福祉と人権― 8月20日～8月23日	内海　淳 (秋田大学)	193
ライフサイエンスⅡ　―生命の連続性― 9月10日～9月13日	石井　照久 (秋田大学)	93
生物学の基礎Ⅱ(D) 9月11日～9月14日	三浦　富智 (弘前大学)	168
国際交流を考える(E) 9月18日～9月21日	諏訪　淳一郎 (弘前大学)	227
合計		681

分科会FD活動

山形大学教員研修会「第9回教養教育ワークショップ」に参加して

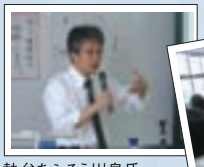
外国語分科会　橋本　学(人文社会科学部専任担当)

去る8月9日、山形大学教養教育棟で行われた上記ワークショップに参加する機会を得た。以下、国立教育政策研究所・高等教育研究部の川島啓二氏による基調講演「学士課程教育改革とラーニング・アウトカムズ」を聴いて、印象に残った知見を簡潔に報告する。

まず、川島氏は近年の高等教育政策の流れを論じた。①「21世紀答申」(中教審)では大学教育について、「課題探求能力の育成」という教育目標の明確化や高度専門職業人養成の重要視など、当時としてはメッセージ性の強い方策が提案された。②「将来像答申」(中教審)では高等教育機関の機能を7つも列挙し、教育の具体的方法論としては様々な特色を持つ多様なものに分化していくのが自然だと述べられた。この①から②への流れは、ある意味"文科省のギブ・アップ宣言"であったと川島氏は観る。一方、②で述べられている注目すべき視点として以下のポイントも指摘された。まず、ディプロマ・ポリシーの明確化や「出口管理」強化を提案した点は高く評価できるとする。この点に関連して文科省をはじめとする各省は、社会人として身につけることが望ましい能力を測るための指標をそれぞれ提案している。川島氏は、それらの指標の中で経済産業省が「企業と教育機関の共通言語」として策定した「社会人基礎力」が評価できると言う。この指標を使った企業アンケート調査結果はディプロマ・ポリシーを策定する際に参考になるだろう。企業が求める能力レベルと若手社員の実際の能力レベルとのギャップが大きかった能力を以下に列挙する。「主体性」・「働きかけ力」・「実行力」、「課題発見力」、「柔軟性」・「ストレスコントロール力」、「コミュニケーション能力」(この能力は他の調査を参考にして、付け足した)。

川島氏は学士課程教育のラーニング・アウトカムズとして、欧米で提唱されているジェネリック・スキルを紹介した。コミュニケーション能力・批判的思考力・IT活用能力など、ほとんどの項目で共通している。イギリスでは、スキル習得レベルの記入履歴「プログレス・ファイル」を各学生に配布し、オーストラリアではスキルを試す試験(GSA)をほぼ全ての大学で導入している。また、日本の参考例として取りあげられた鳥取大学では4層からなる「人間力」のパラダイムを各教員がシラバスの記述に敷衍しながら利用している。

最後に、大学教育のソフト・スキル育成例として、中央大学総合政策学部の「国際インターンシッププログラム」が紹介されたが、文脈なき単なる経験に終わらぬよう、プロジェクト性・ストーリー性・自己発見性などの要素を十分に取り入れる必要を感じさせられた。


熱弁をふるう川島氏

教室も熱気に包まれた

教育評価・改善部門

教育評価・改善部門　江本　理恵

■全学共通教育授業公開

平成19年6月4日～6月8日の間、全学共通教育のすべての授業を公開する「授業公開」を行いました。昨年度より保護者による授業モニター制度を発足し、モニターの方々とセンター長、センター教員とで懇談する機会を設けています。保護者の方々と話をしていて気がついたのは、最近の大学は教育に力をいれているにも関わらず、保護者のイメージは昔の大学のまま（休講が多い、成績評価はいい加減、など）ということです。大学はもっと積極的に社会へ情報発信しなければなりませんね!

この授業公開がその機会の1つとなればいいのですが、なかなか参観者が増えないのが悩みの種です。

■東北地区大学教育支援施設等交流会議

昨年、岩手大学から東北地区の大学に呼びかけて設立した「東北地区大学教育支援施設等交流会議」を、今年度も7月27日、28日にかけて岩手大学にて開催しました。参加大学は、弘前大学、東北大学、山形大学、福島大学、岩手県立大学、青森県立保健大学と岩手大学の7大学です。27日には、会議のテーマに「FDの義務化への対応」を掲げ、各大学で現在行っているFDや今後の計画等を発表し、その内容についての質疑応答を行いました。参加者の顔と名前が一致する人数であることも手伝って、非常に活発に意見交換が行われました。

各大学とも、大学設置基準の改訂に伴ういわゆる「FDの義務化」への対応には苦慮していること、そして、東北地区の大学同士で協力し、資源を共有してこの難題に取り組む方針が確認されました。

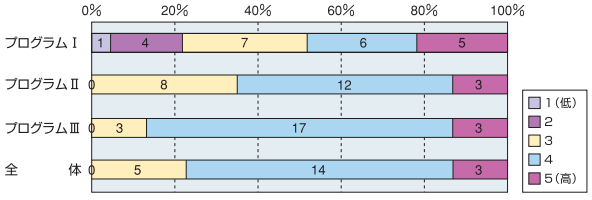
■FD合宿研修会

平成19年9月6日、7日の1泊2日で恒例のFD合宿研修会を行いました。今年は、大学院設置基準の改定にあわせて「大学院教育（修士課程）の実質化／国際的な通用性・信頼性を考える」というテーマを掲げ、3つのプログラムを用意しました。企画担当者としては、プログラム構成についての反省点も多いのですが（後半はやはり疲れます）、今年も各プログラムで行われた発表・議論は非常におもしろいものでした。

以下にアンケート結果の一部を提示します。

Q.各プログラムと全体について、5段階で評価してください。

プログラムⅠ：今、大学院にもとめられているものは?
プログラムⅡ：海外・他大学の状況と岩手大学の進む方向
プログラムⅢ：岩手大学の大学院の特色を考える



■大学・大学院設置基準の一部改訂について

大学設置基準の改定に伴い、いわゆるFD活動を実質化することは、私たちセンター教員に課せられた大きな課題です。FD先進国と言われるアメリカの大学では、「研究の時間を十分確保する」ために、「教育に関する合理的な手法をトレーニングして身につける（その結果、効率よく授業の準備、実施ができる）」方針を掲げ、それこそ大学院生から教育トレーニングを行っています。もちろん、このようなシステムをすぐに岩手大学で導入することは困難ですが、大学教員が研究と教育とをより良く両立させられるよう、なんとか研修のシステムを整えていきたいと考えています。

■学生による授業アンケート

教育評価・改善部門では、全学共通教育科目を対象として、前期・後期と学生に「授業アンケート」を実施しています。そして、平成18年度後期に行った授業アンケート結果に基づいて、平成18年度後期の全学共通教育優秀授業科目を選出しました。※

昨年度より、優秀授業科目担当教員の方々と役員、センター長との懇談会を開催しており、今回は、齋藤徳美理事をお招きしての懇談会を7月11日に開催いたしました。

さて、ここ数回の授業アンケートの結果を見ていると、学生の日常の勉強時間の短さが気になります。もちろん、大学生なんだから自分から勉強をすべきなんですが、特に共通教育が対象にしている低年次の学生は、そもそも「自分で勉強する」習慣がない学生も多くいます。できれば、先生方から、学期途中に複数回の簡単なレポートを課すなど、少しでも学生が授業時間以外にも学習する動機付けを与えていただけないでしょうか。アイアシスタントの学習支援の機能は、学生の授業時間以外の学習を促進する活動の手助けになるものです、ぜひ、ご活用ください。

※選出基準は、「年次報告2005-2006」に掲載されています。

平成18年度後期全学共通教育学生による授業アンケートに基づく優秀授業科目一覧

■人間と文化

0015	欧米の文学	長野俊一
0025	日本事情B	松岡洋子
0008	適応の理解	早坂浩志
0002	倫理学の世界	小林睦
0003	倫理学の世界	宇佐美公生

■人間と社会

0031	現代社会と経済	藤原千沙
0035	社会的人間論	塚本善弘
0044	対人関係の心理学	堀毛一也

■人間と自然

0053	数理のひろがり	三浦康秀
0062	自然と法則/物理学B	八木一正

■総合科目

0065	これからの健康科学	澤村省逸

■環境教育科目

0069	「環境」を考える	牧陽之助
0070	「環境」を考える	竹原明秀

■情報科目

0402	情報基礎	福永良浩

■外国語（英語）

0107	英語B	LOWELL SAYERS
0161	中級英語	小林葉子
0162	中級英語	TOWNSEND SIMON
0139	英語B	BLAIR BENJAMIN REED
0141	英語B	TOWNSEND SIMON
0138	英語B	SHORT KEVIN ANTHONY
0122	英語B	LOWELL SAYERS
0123	英語B	BLAIR BENJAMIN REED
0155	英語B	LOWELL SAYERS
0112	英語B	TOWNSEND SIMON
1152	英語B	BLAIR BENJAMIN REED
0108	英語B	BLAIR BENJAMIN REED
0109	英語B	ISHIKAWA PEGGY
0110	英語B	KENNEDY ANTHONY J.

■外国語（英語以外）

0254	初級中国語（発展）	崔華月
0270	上級日本語D	松岡洋子
0250	中級ロシア語	長野俊一
0229	初級フランス語（発展）	加藤隆
0269	中級韓国語	楊政亜
0239	初級フランス語（発展）	加藤隆

■健康・スポーツ

03051	体力トレーニング	澤村省逸
03012	ラケットスポーツ	浅沼道成／大賀圭造
03061	ニュースポーツ	浅沼道成
03036	ラケットスポーツ	八橋徹英
03031	バドミントン	清水茂幸
03055	卓球	佐々木優次
03013	バドミントン	高城靖尚

平成19年7月11日　全学共通教育科目優秀授業表彰状授与式にて

専門教育関係連絡調整部門

専門教育関係連絡調整部門長　玉　真之介

■専門基礎教育担当教員の減少

昨年度、この部門では専門基礎教育が深刻な問題を抱えたまま放置されている現状が取り上げられ、それに対する検討を行いました。その結果、専門基礎の担当教員に対する理解が学部間（とりわけ、人文社会科学部と工学部）で食い違ったままであることが問題の根源にあると判明しました。この問題を解くために、部門として「一般（共通）教育等担当教員数の推移について」をまとめ、3月15日付けで公表しました（大学教育総合センター『年次報告2005-2006』に収録）。

ポイントは、平成12年度の全学改組の1部として専門基礎教育が全学共通教育から各学部の専門教育へ区分変更となり、それに伴う措置として人文社会科学部から工学部へ2名、農学部へ2名の教員定員が移動していることです。しかし、農学部移動の2名は工学部の福祉システム工学科創設への協力要員2名に消え、工学部へ移動した2名も福祉システム工学科の専門教育教員に使われていることから、工学部・農学部で専門基礎教育担当教員は増えておらず、定員移動が認識されていません。一方で、人文社会科学部では、移動した定員の削減を定年退職で実施していくために、専門基礎教育を担当する教員は毎年のように減っていっています。

こうした事実の理解が、専門基礎教育の充実を図る上では、前提として特に重要です。

■専門基礎教育の在り方懇談会の設置

今年度は、こうした事実認識に立って、今後の専門基礎教育を充実させる方策を検討するために、専門基礎教育の在り方懇談会を設置しました。そこで、これまでの経緯も踏まえながら、学生の基礎学力の現状や学部を越えた総合的な対応策の検討を行うこととしました。

最初に問題としたのは、工学部・農学部の教務委員会と人文社会科学部の担当者の間で専門基礎の内容に関する連絡調整が十分ではなく、担当者の減少に対する対応策も組織的なものではない現状です。その一方で、新学習指導要領による学生の入学で、学生の専門基礎学力はきわめて偏ったものとなっており、このままでは学部の専門教育が崩壊する可能性もあります。

このため、19年度前期にまず取り組んだのは、科目別に全学の関係教員が集まって専門基礎教育に対する全学的対応について懇談する科目別懇談会の開催です。

■科目別懇談会の開催

専門基礎教育科目別懇談会は、5月31日に物理、6月28日に化学、7月5日に数学、7月26日に生物について開催され、いずれも多くの出席者がありました。各懇談会では、学生の概念的な理解が弱くなっていることや、バランスを欠いた理科知識の問題、入門科目への受講生の集中、自ら学ぶモチベーションの低さなどが話題となると共に、こうした懇談会が平成12年以降、1度も開かれていない問題なども指摘されました。

その上で、専門基礎教育を充実するために、非常勤の活用も含めた全学的な協力体制を作る必要性や、習熟度別のクラス編成、標準的なテキスト作成などの課題が提起されています。しかし、担当教員から強く要望されたのは、各学部・学科・課程が専門基礎で何をどこまで教えるかという到達目標を明確にすると言う点でした。

今後、在り方懇談会の場で、出された論点を詰めていくことになりますが、当面は工学部から強く要望の出された数学教育をどのようにするかが課題となります。

また、他大学の取組を参考に、来年度はぜひプレースメントテストを実施してみたいと考えています。

学生生活支援部門

学生生活支援部門長　玉　真之介

■第50回岩手大学ロードレース大会

昭和33年（1958）から途切れることなく続いた岩手大学ロードレース大会が、5月26日（土）、第50回記念大会として開催されました。

大会を記念して特別ゲストにアルベールビルオリンピック・ノルディック複合団体ゴールドメダリストの三ヶ田礼一さんを迎え、例年を上回る学生217名と教職員8名が、御所湖畔をコースとする12キロに心地よい汗を流しました。

ゴール後に行われた公開インタビューでは、三ヶ田さんから地球温暖化がウインタースポーツに与えている深刻な影響など興味深いお話しと共に、持続することの大切さについてメッセージをいただきました。

つなぎ温泉での公開インタビュー

■Let’sびぎんプロジェクト10件を採択

今年度は、入学式後のオリエンテーションで前年度優秀プロジェクトが新入生に向けて発表を行い、公募要領にも具体例を盛り込むなどの工夫をしました。その結果、応募件数も15件に上り、1年生だけのプロジェクトや海外支援をテーマにしたプロジェクトなど、バラエティーに富んだプロジェクトが10件採択されました。

すでに、活発な活動が続けられています。どのプロジェクトが最優秀プロジェクトを獲得するのか、楽しみにしています。

学長から激励を受けるプロジェクト代表者

■学生議会と協働で駐輪指導を実施

学内駐輪マナーの向上は、キャンパス丸ごとミュージアムを掲げる岩手大学にとって重要な課題です。これを強権的にではなく、大学らしく学生参加型で進めることを目指して、7月17日（火）から20日（金）までの4日間、本部門兼務教員と学生議会運営委員、学生支援課職員の三者が協働で中央食堂前の駐輪指導を行いました。

放置自転車は今年も400台。環境マネジメントの観点からも、自転車問題は引き続き重要な課題です。一市民としてのマナーからも、今後も学生とともに駐輪問題や放置自転車問題、走行マナーの改善等に積極的に取り組んでいきたいと思います。

駐輪指導する学生議会メンバー

「就職支援事業の推進とその成果を期待」

～組織的な就職支援等の展開で大きな意外な成果を～

就職支援課長　後藤　周悦

■就職支援部門の取り組み

主要企業の来春の新卒採用人数は、前年比9.8％増で5年連続前年度を上回ったと報道され、「売り手市場」の状態はなお次年度も継続する模様である。

本学でも「求人情報公開システム」への求人情報登載企業数が平成19年9月末現在で既に約6,500社に達し、予想以上の伸びとなっている。（首都圏等県外からの求人が特に目立つ）

この様な就職環境の中にあって、本学の各種就職支援事業等の取組について、各事業等を無駄なく組織的に連携させ、一つ一つの小さな成果を大きな成果として結実させるよう努力したい。

■キャリア教育（各種就職ガイダンス等も含む）の充実と学生の資質向上

キャリア教育（各種就職ガイダンス等も含む）の充実と学生の資質向上を図り、希望する企業等への就職者数を質・量とも増やし、就職先でのOB・OGの活躍が大学の評価アップとして還元され、次の求人に繋がるような「好サイクル」を目指し、組織的で継続的な教育支援・就職支援等を推進する必要がある。

■組織的に連携した各種就職支援事業等による成果

①学内企業合同説明会充実の効果・成果

学内企業合同説明会の充実により、参加希望企業数の増加と参加企業数、求人票も増え、学生の就職対象としての選択企業数が増加する。また、採用担当者の大学訪問機会も増加し就職に関する情報交換・相互理解が進展し、大学との信頼・友好関係がより親密に構築され、採用内定者数の向上に繋がってくる可能性が大である。

②企業訪問が就職支援・教育支援に効果

企業訪問の実施により、企業等のニーズ、採用したい学生像、大学に対する期待や忌憚のない意見・要望等についての貴重な情報を入手でき、学生への就職支援・教育支援等に生きた情報として活用することができる。

③求人票の増加とその効率的な利活用による「好サイクル」

「売り手市場」で、求人票の入手件数が多大になってきているが、システム登載処理、データ保存・管理、利用システム等が円滑に行われ、求人情報を素早く学生等に提供できる体制が整っている。また、同求人情報を就職担当教員等にもメール送信するなど、求人情報の共有により組織的で効率的な求人情報提供システム体制をとっている。また、これらの仕組み（学内の求人情報公開システムの登載、利活用状況等）を企業の採用担当者にPRすることで求人企業が増える。求人票が増えることにより利用者が増え、利用効率が上がる。そしてまた求人者（票）が増えるという「好サイクル」を生み出している。

④企業データの利活用

蓄積された多くの企業情報の利活用により、学内企業合同説明会、企業訪問の実施、また、大学の評価や地域連携との接点等の資料等にも幅広く利活用できる。（情報が多ければ多いほど利用範囲が広がる→「好サイクル」）

⑤その他

予想外のその他の成果も期待しながら前向きに…。

自分の将来について考え、自分の意思で主体的に行動することを支援します！

「キャリアを考える」（全学共通教育・教養科目・人間と社会）　担当者　中村　謙一

1. キャリアとは生き方のこと

この講座では「キャリア」を単なる職業ではなく「生き方」と捉え、自分の人生（ライフキャリア）について考え、働くこと（ワークキャリア）を含む、「社会に出る」ための準備をします。

2. 生き方は早い時期から考える

キャリア教育は早い時期から始めることで効果があがります。前期は学部2学年が対象で、平均受講者数105名、15回で延べ1570名が受講、後期は工学部1学年も対象です。

3. 「訊く」「考える」「学ぶ」

多くの学生が将来に対して漠然とした不安を抱いております。それは「自分に自信が持てないと思いこんでいる」ことや、「社会に出るという未知の体験への不安」から来ている場合が多いものです。これから進んでいく社会や仕事、働くことについて経験者に「訊く」。これまでの自分（財産）とこれからの自分（夢・目標など）について「考える」。大学生活を通じて、知識と人間力（社会で生き抜く力）を「学ぶ」ことで前向きな思考が働きます。

4. 授業は三部構成

第一部では自分を知ることから始めます。振返りにより自分の保有力を分析し自分の将来について考えます。
第二部ではOB、OGの人生から人と社会について考えます。社会に出る事とは?働くとは?などを考えます。
第三部では自分のめざす姿に向かうために、大学生活をどう充実させるか、何をどう学ぶかを考え計画します。

5. 講座の特長

・社会で活躍中の5人のOB、OGから学生時代の重要性と社会人の喜びや責任を学ぶ
・産業界の経営手法（目標管理、経営分析、カイゼン等）を導入
・自分や社会を考える機会を多く取り入れた能動型授業
・自分自身のこれからの大学生活充実計画を企画立案

6. 多くの学生が前向きな姿勢に変化

講座が進むにつれて学生の姿勢に変化が見られます。自分について考えることは難しかったが、自分と向き合う時間を持つことは有意義であった。これまでの与えられた路線から、自分の意思で行動する段階に入ったことを理解した。　等々

キャリア支援は自立支援です！

第1段階：自分を知る（過去・現在・将来）／働く意味を考える（目的と手段）　キャリア形成と就職活動の全体像を理解し、自分について考える。

【第1回】　キャリア形成概論
キャリア形成と就職活動
【第2回】　めざす姿を考える
将来の夢・目標・ビジョン／働く意味を考える
【第3回】　自分について考える
振り返りで自分の宝を探そう
【第4回】　仕事について考える
主観的価値と実現可能性／業種と職種
【第5回】　コミニケーション能力を考える
受信力と発信力／ストレスを味方に

第2段階：人と社会を知る（身近な先輩の人生から）
多彩な職業の先輩たちの熱いメッセージ、キーワードは「変化」と「行動」。社会に出ることは厳しくつらいが喜びはもっと大きい。

【第６回】　農学部OB　営業、販売
【第７回】　教育学部OG　マスコミ
【第８回】　工学部OB　IT関連
【第９回】　教育学部OB　製造
【第10回】　人文社会科学部OB　金融機関

第3段階：これからの自分を考える。めざす姿を考えるために企業の中を知り、就職力を学び、めざす姿に向かって大学生活をどう充実させるかのキャリアプランを計画する。

【第11回】　企業の中を知る
目標管理と変化対応力、経営分析
【第12回】　就職力を学ぶ①
応募書類、志望動機、自己PR、コンピテンシー
【第13回】　就職力を学ぶ②
面接、表現力、就職活動の誤解と勘違い
【第14回】　キャリア形成アクションプラン検討
企業における「目標管理手法」を参考に学びプラン（どんな学生生活を送るか）を考える
【第15回】　キャリア形成アクションプラン作成

現代GP（各学部の特性を生かした全学的知的財産教育）

教育評価・改善部門　福永　良浩

■全学共通教育「知的財産入門」開講

4月よりスタートした1年生向け全学共通教育科目の「知的財産入門」は、より多数の受講生の出席を可能とするように同じ内容の授業を月曜の午前と午後とで行うものですが、合計500名近くの学生が受講いたしました。また、講師として現役弁理士の先生からの講義は非常に学生にわかりやすく説明して頂きました。

■全学共通教育への“知財教育”の試み

全学共通教育科目である「情報基礎」と「市民生活と法」の授業の1コマをお借りして行った「特許交渉と紛争の現場」および「著作権と情報」の前期については計7クラスが終了し、500名以上が受講しました。また、後期3クラスも合わせると実に700名程度の学生が受講することとなり、「知的財産入門」とこれらの取り組みによって、初年次から全学部に知的財産教育が浸透してきたものだと実感しています。

■教育学部「デザイン特別演習」における知財教育

弁理士の先生から「デザイン・美術品の保護」に関する講義やプロダクトデザインの領域での「特許・意匠」に関する講義などを行いました。24名の受講者（美術専攻）がおり、学生が実際にデザインしたときの特許・意匠について議論したことで、最低限の法律を知っておく必要性を認識したのではないかと思います。

■「知財ワークショップ」（集中講義）

本年度は30名の受講者が8/4に事前研修を行い、現地（葛巻:5名3グループ・遠野:5名3グループ）の説明とIPDLを利用して調査を行った。大半の学生が「知的財産入門」を受講していたことから基礎知識は十分でありました。

8/6は自主的に現地の下調べを行ってもらい、8/7の現地調査に向いました。葛巻班（佐藤・南・山崎・丸岡先生が引率）は8:00―大学出発、9:30―上外川風力発電、10:30―くずまき高原（バイオマス・牧場:講話）、12:00―昼食、13:30―中村町長から講話、14:30―江刈ワイン工場見学:葛巻高原食品加工株式会社（講話）、17:30　大学到着・解散となった。遠野班（宮本・福永・船越先生が引率）は8:00―大学出発9:30―「もくもく絵本&トネーゼ」（森林センター会議室:講話と施設見学、12:00―昼食、14:00「ビアンラルク」（菊池理事長先生より講話）、15:30～16:30―「およねはん」（コトブキ化合:佐藤しげ子先生より講話と施設見学）、18:00―大学到着・解散となった。

8/8はKJ法を用いた現地調査のまとめと8/9に行うプレゼンにむけての事前発表を各班が行い、各引率教員からコメントや指摘を受けた。8/9のプレゼンでは各班ともに非常によくまとまった内容で発表され、現地への提案も多く含まれており、大変良かったと思います。

今後の課題は事前に設定されていた素材だけではなく、学生自身が自ら素材を探して行くことが重要ではないかと考えています。また、調査場所についても今回は葛巻と遠野でしたが、1か所に集中して各班で素材を探索したり議論したりするのも良いかもしれません。

GP研究員　三木　敦朗

■ESDセミナー報告

本学のESD（持続可能な発展のための教育）の取り組みの一つに「ESD銀河セミナー」があります。各界で持続可能な社会づくりに関わっていらっしゃる方々を講師としてお招きし、教職員・学生・市民それぞれが認識を深める機会です。

「ESD銀河セミナー」は、これまでに9回開催されました。今年度は第6回～第9回が開催されています（第10回を11月に開催予定）。それぞれの開催日・テーマ・講師は以下の通りです（肩書きは開催当時）。

⑥5月6日『環境教育の進化としてのESD』
佐藤真久氏（武蔵野工業大学講師）
⑦7月13日『「強者の政治」と高等教育』
山口二郎氏（北海道大学大学院教授）
⑧8月8日『大学生の「国語力」を語る』
コーディネーター：家井美千子氏
⑨10月5日
『国際多文化社会における挑戦と求められる人材』
村上清氏（ドイツ証券株式会社人事部担当部長）

昨年度（2006年度）初期のセミナーは、ESDの概略や情報交流をおこなう内容でした。最近では、より多面的・実践的な性質なものへと発展をみています。

例えばここ3回では、本学のESDの特徴である高等教育型ESD（HESD：Higher Education for Sustainable Development）に深く関わる内容となっています。

⑦では、持続可能な社会が座して到来するものではないことや、その中での大学の役割・学問に臨む態度について、討論しました。とりわけ、高等教育においては難しい課題に挑んでこそ学問的に鍛えられるという話は、学生諸君を鼓舞するものであったと思います。⑧では、学問をおこなう上で欠かせない論理的思考能力を育成することついて、高校教諭のみなさんと議論しています。高等教育に至るまでの学習環境に、図書館・書店の不足など少なからぬ地域的課題が存在することが指摘されました。これらは将来的な幼小中高大連携にも視野を拓くものです。⑨では、学生が社会の各方面に出て持続可能な社会づくりに関わろうとするときに、どのような心構え・準備・実績が必要か、熱っぽい質疑応答が続きました。「理解力はあるがおとなしい」と評せられる本学の学生が、地域社会あるいは世界において確かな役割を果たせるようになるには何が必要か。同郷人からの貴重なアドヴァイスをいただきました。

学生諸君にセミナーをただ聞いてもらうだけではいけません。持続可能な社会づくりをおこなう「人づくり」のためには、聞くことにプラスして、自ら考えぬき、講師の先生方や他の参加者と議論をし、また日頃の学習・研究態度にも不断に反映してもらう必要があります。

そういうESD銀河セミナーを実現するために、今後ともみなさんにご助力いただければ幸いです。

第7回ESD銀河セミナー　平成19年7月13日

第9回ESD銀河セミナー　平成19年10月5日

アイアシスタント

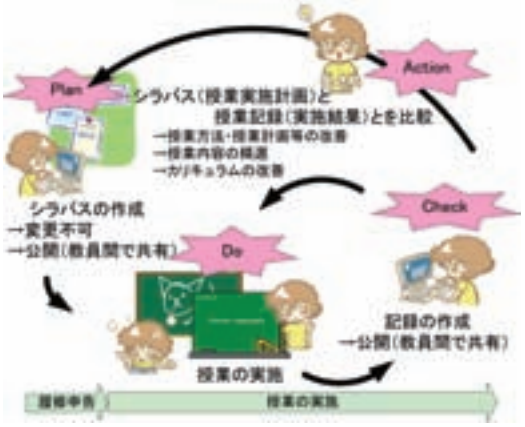
教育評価・改善部門　江本理恵

平成19年度から本格稼働させたアイアシスタントは、単なるWebシラバスシステムではなく、授業期間中を通して使うことのできる総合的な教育支援システムです。また、日常的に「組織的な教育改善」を行うためのシステムであり、このシステムの活用は、岩手大学の最も基本となる「FD活動」として位置づけられています。

アイアシスタントの「基本機能」は、シラバス（授業計画）と授業記録です。この「基本機能」は、授業実施におけるPDCAサイクル（授業計画の作成（Plan）→授業実施（Do）→授業記録（Check）→改善策の検討（Action））を行うためのシステムです。授業実施後にその回の授業内容を見直すことで、次回以降のスケジュールの調整ができ、学期の終わりに当初計画と比較することで、次年度はより実態にあわせた授業計画を立てることができます。

また、これらのシラバス、授業記録は公開ですから、教員同士でお互いに確認できます。学生が前の学年で何を学んできたか、今、他の授業で何を学んでいるかを確認することで、自分の授業内容をより学生の学習状況にあわせることができます。場合によっては、カリキュラムそのものの見直しが必要になることもあるでしょう。そのための基本情報の収集、蓄積に、ぜひ、このアイアシスタントをご活用ください。

「アイアシスタント」を利用した日常授業実施におけるPDCAサイクル



授業紹介！ インタラクティブな授業を目指したアイアシスタントの利用

「科学英語」　上村康子（農学部非常勤講師）

農学部専門教育科目「科学英語」では、「インタラクティブ」な授業を目指しています。アイアシスタントは、昨今の学生気質や、授業以外に学生と関わりにくい非常勤講師に適していますが、インタラクティブな授業の実現にも役立ちます。

毎週の授業直後には、配布物や資料、次週の課題を「授業記録」にアップします。作業そのものは短時間で終わりますが、学生は予習・復習に利用でき、欠席者も必要な情報をすぐに入手できるので、便利な機能です。参考文献（論文・ウェブサイトなど）も、学生が各自ダウンロードするので、版権問題の懸念もなくなります。

授業中にできなかった連絡や質問への返答は、「お喜楽板」（BBS）を使います。学生も課題や授業の質問などをここに書いてきます。メールアドレスなどの個人情報を知られずにこれができるのは、最大の利点かもしれません。

アイアシスタントを利用した課題の提出も試みましたが、とまどう学生はいないようでした。講師側も、提出時刻などの情報も入手でき、体裁もそろい、どこにいても採点ができるので、非常に便利です。

学生同士のインタラクションの場としては、「グループ板」が予想以上に効果的でした。私やTAは見守るだけでしたが、グループ単位でかなり活発に情報や意見の交換が行われていました。「閉じた」グループの中では学生も抵抗がないのかもしれません。

今後、クラス全体、あるいは外の方々も交えた、より開かれた空間での「インタラクティブな授業」を目指していくためには、「グループ板」だけではなく「お喜楽板（テーマ板）」を用いた討議を活発化させていかなければなりません。けれども、これは、時とともに解決されるだろうと考えています。アイアシスタントが日常の学生生活に不可欠な媒体として定着していけば、抵抗感は消えていくはずですから。

この授業では、今後も、TAや学生と一緒にアイアシスタントのより便利な活用法を探っていきたいと思います。

全学共通教育の理念と教育目標

理　　念

岩手大学は、各学部が行う専門教育とならんで、所属する学部にかかわらず全学生が共通に受けるべき教育として全学共通教育を設け、「基礎的な知識の習得を求め、多様な領域に対する学問的関心を喚起するとともに、幅広く深い教養と総合的な判断力を培い、豊かな人間性を涵養する」ことをその理念としています。

この理念を実現するために、全学共通教育は岩手大学の全ての教職員の関心・責任・協力のもとに実施されています。

教　育　目　標

全学共通教育科目は、「転換教育科目」、「共通基礎科目」及び「教養科目」によって構成され,それぞれの教育目標を設定して全学共通教育の理念の具体化を図っています。また、この三つの区分の下に、それぞれに対応する授業科目群を設けて、より具体的な教育目標を明示しています。

さらに、教育目標の達成に当たっては、国連「持続可能な開発のための教育（Education for Sustainable Development : ESD）の10年」(注)を共通に意識することに努めています。

（注）2002年にヨハネスブルク（南アフリカ共和国）で開催された「持続可能な開発のための世界首脳会議」（ヨハネスブルク・サミット）で日本が提案して決議に盛り込まれ、同年の国連総会においても日本の提案で採択されて、2005年から開始されている世界的な教育キャンペーン。

1. 転換教育科目の教育目標

転換教育科目は、全学共通教育へのイントロダクション、専門教育へのイントロダクション、そして大学生活へのイントロダクションの三つを役割とする科目です。転換教育科目は、大学での新たな学びについて、少人数のクラスで学生が互いに学び合うことを目指しています。また、大学での学びを社会生活への第一歩と意識して、そこでのルールやモラルも合わせて学ぶことも目標の1つです。

2. 共通基礎科目の教育目標

共通基礎科目は、学生が在学中に教養科目と専門教育科目の学業を進めるうえで、また卒業後の社会生活を進めるうえで共通に必要な基本的技能やその基礎となる知識を全学生に習得させることを教育目標とする科目です。授業科目は、「外国語科目」、「健康スポーツ科目」および「情報科目」に区分されます。

3.教養科目の教育目標

教養科目の教育目標は、特に上記の全学共通教育の理念における「幅広い教養」、「深い教養」及び「総合的な判断力」という3項目に基づいて、次のように設定されています。

①さまざまな学問分野の「ものの見方・考え方」や知識を幅広く習得することにより、自分自身の専門分野の仕事の全体的な意味や役割を知り、その専門的な知識を生かすことのできるような幅広い教養を自ら培うことへの教育的支援。

②あらゆる分野の日常生活の営みの基盤になっている各種の常識・通念を根底的に深く問い直すことができるという意味での、深い「ものの見方・考え方」や知識を習得することにより、自然との関係においても人間との関係においても、創造的・個性的に生きるうえで必要な深い教養を自ら培うことへの教育的支援。

③多角的な「ものの見方・考え方」や学際的な知識を習得することにより、激しく変動する現代社会の複雑な諸問題に柔軟に対応できるような総合的な判断力を自ら培うことへの教育的支援。

以上のような教育目標の達成をめざす教養科目は、「人間と文化」、「人間と社会」、「人間と自然」、「総合科目」、「高年次課題科目」及び「環境教育科目」に区分されます。

委員会及部門会議名簿

大学教育総合センター運営委員会委員名簿

（平成19年10月1日）

	氏　名	所　属
センター長	玉　真之介	理　事（学務担当）
副センター長	岡　田　仁	人文社会科学部
入試、専門教育関係連絡調整、学生生活支援、就職支援部門長	玉　真之介	理　事（学務担当）
全学共通教育企画・実施部門長	岡　田　仁	人文社会科学部
教育評価・改善部門長	後　藤　尚　人	人文社会科学部
副学部長	井　上　博　夫	人文社会科学部
	加　藤　義　男	教育学部
	長谷川　正　之	工学部
	高　畑　義　人	農学部
教務関係委員長	田　口　典　男	人文社会科学部
	菅　野　文　夫	教育学部
	成　田　榮　一	工学部
	橋　本　良　二	農学部
学務部長	松　井　照　雄	学務部

大学教育総合センターセンター会議委員名簿

（平成19年4月1日）

	氏　名	所　属
センター長	玉　真之介	理　事（学務担当） manabi-shien（6904,6050）
副センター長	岡　田　仁	人文社会科学部 okadah（6741）
入試、専門教育関係連絡調整、学生生活支援、就職支援部門長	玉　真之介	理　事（学務担当） manabi-shien（6904,6050）
全学共通教育企画・実施部門長	岡　田　仁	人文社会科学部 okadah（6741）
教育評価・改善部門長	後　藤　尚　人	人文社会科学部 ntgoto（6761）
センター専任教員	山　崎　憲　治	yamaken（6925）
	永　野　拓　矢	tnagano（6926）
	江　本　理　恵	riemt（6924）
	福　永　良　浩	fukunaga（6478）
学務部長	松　井　照　雄	学務部 tmatui（6051）

委員会及部門会議名簿

■入試部門会議委員名簿

（平成19年4月1日）

	氏　名	所　属
部門長	玉　真之介	大学教育総合センター長
専任教員	永野　拓矢	大学教育総合センター
兼務教員	古川　務	人文社会科学部
	辻野　哲司	教育学部
	山口　明	工学部
	山岸　則夫	農学部
各学部入試委員会（正･副委員長）	海老澤　君夫	人文社会科学部
	北爪　英一	人文社会科学部
	遠藤　匡俊	教育学部
	内山　三郎	教育学部
	菅野　良弘	工学部
	大石　好行	工学部
	倉島　栄一	農学部
	長澤　孝志	農学部
入試課長	加藤　博	学務部

■全学共通教育企画・実施部門会議委員名簿

（平成19年10月1日）

	氏　名	所　属
部門長	岡田　仁	人文社会科学部
専任教員	山崎　憲治	大学教育総合センター
兼務教員	齋藤　博次	外国語分科会
	小笠原　義文	健康･スポーツ分科会
	佐藤　拓己	情報基礎分科会
	小林　睦	思想と文化分科会
	松岡　和生	心と表象分科会
	横山　英信	公共社会分科会
	今泉　芳邦	現代の諸問題分科会
	黒田　榮喜	生物の世界分科会
	西崎　滋	自然と数理の世界分科会
	恒川　佳隆	科学技術分科会
	河合　成直	環境分科会
各学部教務委員会	中村　安宏	人文社会科学部
	押切　源一	教育学部
	恒川　佳隆	工学部
	黒田　榮喜	農学部
学務課長	古井　修子	学務部

■教育評価・改善部門会議委員名簿

（平成19年10月1日）

	氏　名	所　属
部門長	後藤　尚人	人文社会科学部
全学共通教育企画･実施部門長	岡田　仁	人文社会科学部
専任教員	江本　理恵	大学教育総合センター
	福永　良浩	大学教育総合センター
兼務教員（学部選出委員）	砂山　稔	人文社会科学部
	小林　睦	人文社会科学部
	名古屋　恒彦	教育学部
	上濱　龍也	教育学部
	小川　智	工学部
	鈴木　正幸	工学部
	立石　貴浩	農学部
	築城　幹典	農学部
学務課長	古井　修子	学務部

■専門教育関係連絡調整部門会議委員名簿

（平成19年4月1日）

	氏　名	所　属
部門長	玉　真之介	大学教育総合センター長
専任教員	山崎　憲治	大学教育総合センター
兼務教員（各学部教務委員会選出教員）	山内　茂雄	人文社会科学部
	押切　源一	教育学部
	成田　榮一	工学部
	河合　成直	農学部
学務課長	古井　修子	学務部

■学生生活支援部門会議委員名簿

（平成19年4月1日）

	氏　名	所　属
部門長	玉　真之介	大学教育総合センター長
兼務教員（各学部学生委員会選出教員）	川本　榮三郎	人文社会科学部
	武田　京子	教育学部
	伊藤　歩	工学部
	塚本　知玄	農学部
学部選出教員	河田　裕樹	人文社会科学部
	菊地　悟	教育学部
	堺　茂樹	工学部
	広田　純一	農学部
学生支援課長	白崎　隆典	学務部

■就職支援部門会議委員名簿

（平成19年4月1日）

	氏　名	所　属
部門長	玉　真之介	大学教育総合センター長
兼務教員（各学部就職委員会選出教員）	竹原　明秀	人文社会科学部
	大河原　清	教育学部
	西谷　泰昭	工学部
	木村　伸男	農学部
就職支援課長	後藤　周悦	学務部

編集後記

長く暑かった夏も終わり、本格的な秋到来です。あと1ヶ月もしないうちに、白鳥の声をきくことになるのでしょう。私にとっては盛岡3回目の冬がもう間近です。

さて、今年は「雪が多い」年か?「雪が少ない」年か?
極端なケースしか知らないので、ちょっとばかり楽しみです。

工房うさぎごや

erudio 7

[2007年11月5日発行]

国立大学法人 岩手大学 大学教育総合センター
Iwate University : University Education Center
〒020-8550 岩手県盛岡市上田3丁目-18-34

【入試部門】	tel.019-621-6926
【全学共通教育企画・実施部門】	tel.019-621-6925
【教育評価・改善部門】	tel.019-621-6924
【専門教育関係連絡調整部門】	tel.019-621-6925
【学生生活支援部門(学生支援課)】	tel.019-621-6058
【就職支援部門(就職支援課)】	tel.019-621-6059

【部門共通】fax.019-621-6928
電子メール uec@iwate-u.ac.jp
Webサイト http://uec.iwate-u.ac.jp/